

「うさぎとかめ」イソップ寓話集

作 アイソポス 訳 中務哲郎

紹介者 榎本博康

[紹介]

イソップ(アイソポス)物語、その中で走る話といえばもちろんどなたもご存知の「ウサギとカメ」です。では全文を引用します。

「亀と兎」(本書では題名が逆で、亀が先でした)

亀と兎が足の速さのことで言い争い、勝負の日時と場所を決めて別れた。さて、兎は生まれつき足が速いので、真剣に走らず、道から逸れて眠りこんだが、亀は自分の遅いのを知っているので、弛(たゆ)まず走り続け、兎が横になっている所も通り過ぎて、勝利のゴールに到達した。

素質も磨かなければ努力に負けることが多い、ということはこの話は説き明かしている。



筆者、うさぎを抱くの図(2010年)

[感想]

イソップ物語は、先に紹介した今昔物語のように、話の宝庫であるが、つい最近(1999年)に新訳が発行された。懐かしく思い出す話があるが、標題とは別に、私の好きな話をひとつだけ紹介する。これは、落語の枕としてもお馴染みのものだ。

だんなが若いお妻さんの所に行くと、年寄りじみてると白髪を抜かれる。年をとった本妻の所に戻るといい年をしてと黒いのを抜かれる。行ったり来たりしているうちに、とうとう禿げてしまったとき。この話は、何につけ不釣合いは怪我のもとと結ばれる。最後にこの手の言葉が必ずつくのがイソップの寓話、つまり教訓的なたとえ話の形式だ。ウサギとカメの話も努力の大切さを説いて終わっている。

先日(1999年)に絵本作家の五味太郎氏が、出身小学校の五年生に対して授業をするテレビ番組をたまたま見た。そこでウサギとカメの話を用いて子供達の想像力を掻き立てていく。一人の足が速いという、いかにもいたずらそうな子を黒板に後頭部をつけて座らせ、黒板に兎の耳とひげを描いた。そして子供達に問い掛ける、「どうしてウサギはカメなんかの申し入れを受けたのだろうか。カメに勝っても、ウサギには何の得もないのにね。」

子供達はいろいろなウサギとカメの話の解釈を始める。心が開放されていく。私も負けずに考えてみよう。たしかにウサギとカメは、良く考えると謎に満ちた話である。ずいぶん前だが、ある先生がやはり授業でこの話を用いたところ、「どうしてカメさんはウサギさんを起こしてあげなかったのですか」という意見が出て、困ったという話を聞いた。ここまでに出的話を含めて疑問を列挙し、考察してみよう。皆さんも一緒にどうぞ。

(1)なぜカメはウサギを相手に選んだのか

カメは人を見る目がある。イソップには沢山の動物が出てくる。鹿も豹も出てくるし、犬や狐だって十分に走れば速い。でもウサギだ。体格も亀とつりあいがまあまあとれるし、余り賢くない。幼稚園や小学校でよくウサギを飼育しているので、実際にご存知の方も多いただろう。ウサギであれば、こういうこともあるさと、聞くものを納得させるキャスティングだ。

(2)なぜウサギはカメの挑戦を受けたのか

これが最も大切な教訓だ。格上の者は下位の挑戦を受けてはならない。勝ったところで、「あたりまえ」もしくは「わざと弱い相手を選んで勝った」と言われ、勝利の意味がマイナスにシかならない。格下のものと競うのは、彼を育成するためか、もしくはよほどファイトマネーがいい場合だ。ウサギが決して名誉にはならないと承知して受けたとすれば、どんな条件だったのだろうか。カメが交渉上手だったとは思えないので、これは誰か第三者が仕組んだのだろうか。またそれがどんな条件にしろ、古今東西2千年以上語りつがれ、ディズニーのアニメや日本の幼児向け絵本になって笑われ続けるとは予想できなかっただろう。

(3)なぜ長距離走で争うことにしたのか

私が幼児の頃見た絵は、遠くの山頂に日の丸の旗が立っていて、そこまで一本道がはるかに続いており、近景でウサギがわざとらしく寝ていて、カメがその前を汗をかきながら走っているものであった。そして見物人（動物）がいる。これが私が初めて目にした長距離ロードレースの図である。原点だ。それ以来、なぜ長距離かなどと思ってもみたことがなかった。まさか将来自分がカメランナーと呼ばれるようになるとも、思っていなかったが。

所でマラソンのペースメーカーはラビットと呼ばれている。先日サンディエゴのロックンロールマラソンを走ったが、この大会では同じ目標タイムに対して複数のボランティアと思われるペースメーカーを配置しており、大部分は真面目なのだろうが、いいかげんな人も居てどんどん落ちてくる。私より1時間早く走るはずのペースメーカーまで落ちてきたので、ああ、このラビットはどこかで昼寝をしていたんだなあ、と思わずおかしくなった、おとぎ話の世界ではなく、現実にもカメがウサギに勝つことがあるのだ。

(4)なぜすぐに競走せず、後日にしたのか

後日ということで、世間のうわさすずめたちのピークパークが聞こえてくる。この間(ま)が非常に利いている。ここでは無謀な挑戦をしたカメがバカだとか、頭が狂ったとか、散々言われたのではないかと思わせる。

(5)なぜウサギは途中で寝たのか

ウサギはこの競走を受けてから、悩んだのではないか。まともに走って勝っても丸で馬鹿みたいだ。そうだ。途中で一旦寝て、カメの後ろからビューっと抜いてゴールしよう。あなたが走って来る間、カメはまるで止まっているようにしか見えませんでしたよと言われるだろう。これだ。これなら私のスピードが評価される。

さて本番では予定通りウサギは狸寝入りをしたが、カメの努力の蓄積を甘く見すぎていて、再び走り始める間合いを取りそこなったのではないか。

(6)なぜカメはウサギを起こさなかったのか

カメは近眼だから、気がつかなかったという人もいるが、これでは面白くない。ウサギとカ

メの圧倒的な格の差があればこそ、カメは平気で寝ているそばを知らん振りでも走り去ることができたのだ。劣るほうがこういう時に得だ。決して非難されない。

たくさん書いたわりには、謎は何も解決されなかった。すべての謎を合理的に説明できる解釈は、陰に仕掛け人がいる八百長の賭けレースであったというものだ。でも夢がないから止めておこう。

私は強調したい、ウサギはいいヤツじゃないかと。アピアランス・フィーを貰って予定通りの途中棄権をする有名選手と違って、負けが見えても愚直に最後まで駆けたのだからね。

(初稿1999. 12. 11)

[リバイバル感想]

最近ペースメーカーと呼ぶが、昔はラビットとも言ったことは先に触れたとおりだ。サンディエゴのロックンロールマラソンのような市民大会では、ペースメーカーは5時間とか、6時間とかのナンバーカードを付けて、時には遠くからもみえるように風船をとばしてゴール直前まで走る。日本の大会のペースメーカーは正確に走ることが多い。

一方世界記録を狙うようなメジャー大会では、途中までペースメイキングをしてレース作りを補助する。20キロまでと30キロまでのペースメーカーを配することが多く、その場合には選手同士の戦いは30キロから始まることになることが多い。レース展開としては面白みが減るが、世界記録はペースメーカー抜きには出にくいのが現状だ。選手同士だけだと駆け引きをしまい、ペース配分が乱れ、また余計な動きで疲れるからだ。しかしオリンピックでは選手だけでペースメーカーが居ないので、強豪国は3人の出場者で役割分担をしている可能性がある。しかしそれを露骨にやると、他国の選手も乗ってしまうので、別の意味での駆け引きが生じる。

日本の主要マラソン大会では長くその存在は伏せられていて、アナウンサーが「あっ、どうしたのでしょうか。先頭集団の××が30キロ地点で突然止まりました。」とわざとらしく解説していた。今は初めから誰がペースメーカーかが分かるナンバーカードを付けている。時代は変わるものだ。

最近見なくなったものに、客寄せランナーというのが1970年頃にはあった。世界的に有名な選手が参加し、ヨーイドンとスタートするのだが、なぜか早い場合にはわずか15キロ位でリタイアしてしまう。この場合もアナウンサーがわざとらしく、一体何があったのでしょうか、とか解説する。これが初稿の文末で触れたことだ。

しかしソップの原文を再び見ると、うさぎがゴールしたとは書かれていない。それは子供のころに見た絵本ではゴールしたように書かれていた記憶にごまかされたのだ。あぶないあぶない、やはり出典を確認しないと。ここに訂正の機会があったことは良かった。うさぎは正に「ラビット」だったのだ。予定の距離を走ってリタイアし、ゴールを踏むことはなかった。負けが明らかになっても、最後まで走りきったエライ子ではなかった。では誰がうさぎにフィーを払ったのか。それは分からないが、誰かがこのレースを仕組んだということだ。

そうだ、これは明らかな八百長レースだ。誰か胴元がいて、金に困っているウサギを使って仕組んだレースだ。だから後日のレースにする必要があった。この間に賭博券を売っておおきな寺銭を得るものだ。そして自分でもカメを買って、当たりを持ち逃げする。これであれば6つの疑問は全て合理的に説明できる。ウサギも一枚買っていたらいい。

(2021. 1. 16)